
俺が神と出会ってから

ヒリュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が神と出会ってから

【Zコード】

Z6656X

【作者名】

ヒリュー

【あらすじ】

俺が車に轢かれてから目覚めたら田の前に神様！？どうにも信じきれないが力を見せられたら信じるしかない新しい世界に転生させてくれるらしいが下手をすると失敗！？うまくいったと思ったら、神^{ゼウス}がついてきた。先が思いやられるが、まあどうにかなるだろう。

初でつたない文章、ご都合主義、作者の趣味満載ですが見てください
ればうれしいです

ダメ出し、意見せジヤンジヤンこいつ下わゆるがここです

それでせよひしへお願ひします。

あと、こいつが掛け持ちしてるのでかなり遅い更新です

物語の始まり

突然だが、今俺は、神様の前にいる。

自分でも何を言っているのか理解できない。

でもそうなのだ、どうしてこうなったか、思い出してもうひとつ想ひへ。

今朝俺は、いつもどいつも朝を過ぎた。

メシを食べ、着替えて、髪型を整えて、学校に行つた。

そしてやはり、いつもどいつも学校だった。

違っていたのは帰り道だ。

横断歩道を渡つていた俺は、運悪く車に轢かれた。

そりやあもうグシャツと、一瞬にして意識が持つてかれたよ。

そして田が覚めたと思つたら自称神の前だ。

「このまでもをまとめるといつなった原因是車の運転手じやねーかああ
！――！

絶対に殺してやる！――！

「いやいや、もう君には殺せないよ」

「えつ」

「えつ、じゃなによ声に出てたからね、思い出してみようと思つべ
らいからね」

「マジで？」

「マジマジ

神つて意外と気さくなんだ。つてじゃなくて――

「声に出てたつてマジ？」

「マジマジ、真剣と書いてマジ」

うつわー俺はずかしー声に出てたとか穴があつたら入りたい。

「はこそこお、顔赤くしてバタバタしない汚れるでしょうが」

「つむせーー恥ずかしいんだよ、つかさつきからなんだよそのしゃ

「へり方女かよ！」

「神に性別はないよ、女にしようとすればできるけどね」

「できんのかよ！」

「できるよ、全知全能の神だからね」

「名前は！言えよ！」

「確かあ、ゼウスだつたかな」

「はあ！？」

「だーかーら、ゼウスだよ」

「俺ってそんな偉いのと話してたのか。でも！」

「証拠を見せてみろよ証拠を！」

「しょうがないなあ」

ゼウスはおもむろに手を振りかざした。すると奴の周りに雷が落ちてきた

「すげえ」

俺は思わずつぶやいていた、ゼウスはきをよべしたのか、「じゃあじゃあこんなのはどう？」

と言いつつゼウスは右手を突き出してきた、突然俺の周りに突風が起きた。

「うわっ！」

「それそれえー」

ゼウスは続けて左手も突き出した、急に風が強まつた。

「わかつたわかつたもういい！」

「そう、じゃあやめるね」

「お前が神だつつう事はよくわかつた

「やつとわかつてくれたあー？」

「そういえば

「俺つて死んだのか？」

「死んだよー、体を見ればわかるんじゃない？」

そう言われてから体を見て気がついた

「体が…透けてる！」

体が半透明だつた

「てことは、ここは天国？」

「ちがうよー、ここは狭間、現世とあの世のね」

「で何で俺はここにいるんだ？」

「それはあ、暇だったからあ転生でもさせてあげようかと思つたさ」

「そんな軽い理由でかよ！」

「で、転生つていつのはね」

「聞けよ！」

「やだ！」

「そんなに全力拒否しなくても、はあ、なんか疲れた」

「露骨な呆れてますって言ひ感じの仕草してないで話をきこてよ」

「わかったよ、聞いてやるよ」

「せめても仕返しに露骨にいやな顔をしてやつた。

「でね、転生つてゆつのね、別の世界に生まれ変わる」となんだけど

この顔に対してもーリアクション！？

ものすごい嫌な顔だと思つんだけどなあ。

「いいことすくめなんだけど、ちよつとだけ欠点があつてね」

「欠点？」

「そう、欠点。」

「どんなのだよ」

「まず、生まれ変わる世界が選べないんだよね」

「選べないってどんな感じに？」

「例えば、前と同じような世界になつたり、荒廃した世界だつたり、すごく技術が進歩してたりね」

「ん？ 同じような世界つてどうしたことだよ？ 同じじゃねーのかよ」「そこがもう一つの欠点、一度と同じ世界には転生できないんだよん？ ちよつとまでよじあ

「輪廻転生はないのか？」

「輪廻転生もあるにはあるけどそれを行うには、何百何千万年と待

つになるとそれに

「それに？」

「絶対に出来るのは、限らない最悪魂が無くなるよ」

「最悪じゃねーか！」

ヒンドゥー教だが、キリスト教だが、

「そつ、転生だつて僕の気が向かないとやんないしねー」「もしかして、俺つて超ラッキー？」

一 転生の行方

「よくかんがえてねー？」

どうするか、へたをすると荒廃した世界、

「転生する」

俺がそう言うとセウスは顔をバアコと喜色一面に

「アーヴィング、おまえがアーヴィングだよ。」

「それじゃあこいつは？」

ゼウスはうつむき何かを唱えだした

3
分
後

「なあなあ、まだかよー?」「準備OKーいくよー、それつ」「えっちょ、なに抱きついて…」「

視界が光に包まれた

物語の始まり（後書き）

これから頑張つていいくとおもつてます。
かきわすれましたが主人公は俺こと風洞龍です
ここまで名前忘れてたおれって

とりあえず人物紹介（前書き）

まだ2人しかいないけど人物紹介
こういうのふつーは1話のまえにやるんだろうな
とか若干の後悔

とりあえず人物紹介

風洞 龍

読み：ふうどうりゅう

愛称：リュウ

年齢：15歳 高校1年生

見た目：ふつーの学生、肩ぐらいまでの少し長い黒髪、そこそこのルックス中の上、上の下ぐらい身長は175cmとそこそこ

服装：服は学ランをボタン全部開けて着ている学ランの下はTシャツ、靴は革靴、服装に関しては今後変更あるかも

性格：基本受け身の人生、なるようになるさ的な思考、どちらかというと人を引っ張る側

その他：死ぬ前は、そこそこ女子からの人気はあった程度はバレンタインに本命を1～2個貰うぐらい頭の切れは良く、成績はいい方、運動神経は抜群すば抜けている。女子からの人気の原因は大体これから。

ゼウス

読み：ぜうす

愛称：ゼウス

年齢：不明

見た目：女に見える、腰の辺りまである白髪、ルックスは上の中ぐらいと可愛い方身長は150ぐらい大体、リュウのアゴの下に入るくらい

服装：白いワンピースのようなものを着ている裸足、首にネック

レスを付けているこちらも今後変更あるかも

性格：マイペース、自由奔放という言葉がぴったりな感じなんでも楽しければOKな感じ人に引っ張ってもらつ側

その他：色々とぶつ飛んだことができる。手をかざすと雷が落ちたりする、他にも色々できる理由は、至極単純に神つまりゴッドだから

とりあえず人物紹介（後書き）

ここにあること

とくに服装、その他は多分変更したりする
人物紹介は3人新しい人物が出てきたらやる
予定でいます

転生後の世界（前書き）

もしかすると
新しいキャラが出てくるかも
ちなみに（）これの中はその人物の心情です
あと「なんでだよ／＼」
とかの／＼は照れている時です

転生後の世界

そよ風が俺の頬を撫ぜていく

風を感じるつてことは転生が終わつたのか？

視界の光が収まつてきた

「ん、ここは？」

そう、咳くと

「ここは、草原だねー」

ゼウスの声が聞こえる、

「つてお前はいつまで抱きついてるんだ！いい加減離れろー！」

「だつてー君の匂いをかいだと安心するんだもん」

「顔を擦りつけるな！そういうことをするなら女になれ、何が悲しくて男かもしれん奴と抱き合わなきゃならねんだよ」

「むー、わかつたよ女になつてあげるよいくよー」

「ん、またそれはそれでまずいぞ

「やっぱちょっと…！」

ゼウスの体が輝くと、ウエストが引き締まり、胸が膨らみ、全体的に丸みを帯びた

「えへへーこれでいいでしょ、えいっ」

「お前胸が当たつてるー離れる」

ゼウスを引き剥がすと地面に座らせた

「まったく、ところでなんで付いてきた？」

「それはー、君の事が気に入つたからだよ」

「んなつ」

「ところでやー、君の名前を教えてよ」

「風洞 龍だ、リュウって呼んでくれ。お前は、下の名前なんて言うんだよ」

「レディアだよ、ゼウス＝レディア、ゼウスでもレディアでもすきなまづでよんでね」

「ふーん、結構可愛らしい名前なんだな」

「リュウのこそカツコイイよ」

なんだか、褒められるのって、てれるな

「まあとりあえず、むにじつのまつに見える町田指そりせ」

「そうだねー」

しばらく歩いていると突然女に話しかけられた

「あんた達つて、旅人かなんか？そんな丸腰で歩いてるヒモンスターに襲われた時大変だぜ」

「じ忠告ありがとう、あんたの名前は？」

「レーナ＝クラシス、レナって呼んでくれ」

「レナか、俺は、風洞 龍、リュウって呼んでくれ。んでこっちが『ゼウス＝レディアだよー、ゼウスでも、レディアでも、どっちで呼んでもくれてもかまわないよー』

「リュウにゼウスか、お前達も、アルジオの町にいくのか？」

「アルジオの町？」

「あつちに見える町だ、良かつたら一緒に行かないか？」

「俺は別にいいけど、ゼウスは、どう思うよ？」

「むー、僕も別にいいよ」

（何で若干不機嫌なんだこいつは？）

「ああ、よろしくな、レナ」

「よつ、よろしくたのむーー」

（今の笑顔は、反則だと思うなー、僕は）

（何で、レナは顔を、赤くしたんだ？もしかして、今の笑顔で俺に惚れちゃったとか！？いやそれはないか、初対面だしな）

「まつまあモンスターが出たら任せてくれ、こう見えてもハンターなんだぞ私は」

「へー、じゃあよろしく頼む」

「まかせておけ」 フンス

「ちょっとー、僕を仲間外れにしないでよー」 ウルウル

「ああ、『めんな』

（涙田のこいつもなかなか可愛いな）

「そんな軽くあしらつてー」

「ともかくそろそろ行こう」

「レナの言つ通りだな、いつまでも拗ねてないでいくぞゼウス」

「ふんっだ」

1時間後ぐらい

「ようこそ、アルジオの町へ」

「ほり着いたぞ、いい加減起きるゼウスそして降りろ」「うにゅー、やだーリュウの背中気持ちいいんだもん」

俺はゼウスをおんぶしていた

「ほり、ゼウス降りなよ、あんましリュウを困らせるな」「はつはつは、親子か何かですかなあなたがたは？」

「いやちがいますよ！」——（この門番余計なことを…）

「そうか、私たちは、親子に見えるのか／／」——（そうかそうか、てことは私とリュウが夫婦か、悪くないな）

「僕は、子供じゃないよー」——（むー、なんだか悔しいな）

「なら、旅人パーティですか？」

「ええ、そうです」——（パーティってなんだ？）

「今日のご宿はお決まりですか？」

「特に決めてないよー」

「では、大通りをまっすぐ行って一つ田の十字路を右に曲がったところにあるスズラン亭にしてはどうでしょう安いですしき」

「どうする、ゼウスとレナはどうする？」

「僕は別に一リュウと一緒にならどこでもいいよ

「私も別にそこでいいぞ安いらしいしな」——（私も別にリュウと一緒になら／＼って何を考えてるんだ／＼）

「じゃあそこにするか、門番さんありがと」——（やこます）

「いやいや当然のことです」

「よし、じゃあしゅっぱつしん」—— タタツ

「走るな走るな、じけるだ」

「あつ」ドテン

「いわんこつちやない、大丈夫か?」

「リュウうー、擦りむいたよおー、いたいよおー」ウルウル

「たく、しうがねーな、背中乗れよおぶつてやるから

「うん」グスグス

——(いいなー、おんぶ羨ましいなーって私はまたーー)

「はあ、じゃあ行こうぜレナ」

「あつ、ああそうしょー」

転生後の世界（後書き）

なんだかテンプレでうつとうか
お約束といふか
ダメ出しがあればぜひぜひ
お願いします

スズラン亭にて（前書き）

前回のレナのフラグ 建築は雑だった
以後気をつけよう

スズラン亭にて

- - - - スズラン亭・桜の間

部屋は洋室つて)

「疲れてるだろうし、俺がなんか買つてくるよ」

「やつか、でもお嘗葉に咲えて休んでこねじる」

テクテク、ガチャ、バタン

「起きてたのか!?」

「そんな」とは置いといて、ちょいと聞きたい」とがあるんだけど、「

「あのね、レナってリコウの事好きなの？」

「え? なに聞こえない」

卷之三

卷之三

「好きだと語つていいる！」／＼ゼウスの方にそぞうなんだ！？」

僕は外語好きなんだ。不思議な言葉で、でも、でもいいから」
(じやなこと、まぐれで転生せたりついてきたりしないよ)

「そんなにさうぜりと話せるほどなのか」

そりゃ、勿論、仕草、言葉、がい、笑顔とれどこれも、初めて見たときから、もう一万年と一千年前からぐらい」

「悪いな！」

「どう、ナタはソレで怒れたの？」

「私はあの初めて見たときに向けられたあの笑顔かな」「へー、笑顔だけで惚れちゃうなんて、軽い女だねえー

「違う／＼笑顔だけで好きになつたのは、初めてだ！一目惚れだよ！／＼」

「まあ、僕もそんなもんだし、人のこと言えないか」

「ゼウスもか、それよりこちらからも聞きたいことがたくさんあるんだ」

「なにに？」

「まづな……」

Sideリュウ・・・

「さて、買い出しに行つてみると書いたものの金がない」

「どうしたもんか」

「そう呟きながら、トボトボ歩いてくると路地裏から

「やめてください！人を呼びますよ！」

「だれもこねーよこんなとこ！」

「そつそつ、諦めた方がいいぜーねーちゃん」

（路地裏でこれつてなんてベタな）ハア

「お前ら何してんだ」

「ああん！なんだあんちゃん」

「痛い目会いたくなかったらすつじんでな

（セリフまでなんてベタな）

「やめてあげるよ、嫌がつてんだろ」

「どこがだよ、なあねーちゃん」

「お願いします助けてください！」

「いーつー」

「やめとけよつと

「女の方を向き、ひざに背を向けた男B（仮）の背中にひざ蹴りをきました

「がつ」

膝をつき倒れこんだ男B（仮）の背中を思い切り踏みつける

「グふつ」

「このやうーー！」

つっこんできた男A（仮）に足掛けをかまし「けたといひをやはつ
踏みつけてやつた2、3回くらこ

「がつ」

「たく、いじつのはど！」にでもいるんだな

「ありがとわ！」れこます、あのお名前は？」

「風洞 龍てゆーんだ、リコウで呼んでくれ、お前はなんてゆー
んだ？」

「わたくしは、アリア＝ガイストと申します、アリアとお呼びくだ
さい／＼」

「アリアかよろしくな、といふでなんでフードを被つてるんだ？」

「いや、あの、それは…」

「外しちゃえよそんなフード、ほり」バサツ

「え、ちょっと、あつ」

「角…？」

「ああ、見られてしましましたが、わたくし魔族と人間のハーフな
んです」

魔族？ そんなものもあるのか、そついやレナもフード被つてたな、向
こうは耳が生えてるとかかな

「別にいいんじゃねーの、角くらい、美人なんだからむつと自信持
てよ」

「や、そうで！」れこますか／＼

「おひつて、俺買い出しの途中だつた」ハア

「そうですか、ではお詫びと言つては何ですが、これをどういへ
差し出されたのは、ビン3つとハムみたいなものだつた

「回復薬とハムで！」れこます

「ありがとな」＝「ツ

「いえ／＼こちぢり」れこ／＼

「でも、ハムなんてどう調理しよう」

「では、わたくしがして差し上げましょうか?」「本当か!?

「えつ、ええ本當で!」
「えます」

「じゃあ、よろしく頼む」
「アクシユ

「わかりましたわーー」
「アクシユ

「じゃあ、後でスズラン亭にきてくれないか?」

「スズラン亭なら、わたくしのいえですよ」

「ほんとか、じゃあいっしょに行こうぜ連れが待ってるんだ」
「わかりましたわ」

- - - - - スズラン亭・桜の間

ガチャ、バタン

「ただいまー」

「おじやまいたします」

「おかえりー、リュウーー」トテトテ、ダキッ

「ゼウスいきなり抱きつくなーーびっくりするだろ」

「だつてーー、リュウとー時間も離れてたんだよーー」グリグリ

「鼻をこすりつけるな、たかだかー時間だろ、離れれば頭撫でてや
るから離れる」

「じゃあ離れる、撫でて撫でてーー」パツ

「はあ、ほれこれでいいか」ワシャワシャ

「うにゅーーー」

「ところで、レナはどこだ?」

「レナならリビングみたいなとこにいるよ

「そつか、ああ、アリアも上がってくれ

「は、はい、わかりましたわ

「レナー帰つたぞつと」

「リュウか、お帰り」

「ただいま

「リュウそっちの人は誰だ?」

「ああ、アリアだ」

「アリア＝ガイストと申します、アリアとお呼びください」

「私はレーナ＝クラシスだ、レナと呼んでくれ

「んで、あつちのが

「僕はゼウス＝レディア、ゼウスつてよんでもねー」

「僕？ゼウスさんは男性なのですか？」

「ううん、女だよー」

「でリュウ、なんで買い出しに行つたら女を連れて帰つてくるんだ」

ピキピキ

「そうだよー、僕というものがありながらー」 プンプン

「えーと、こうなつた理由はだな

----- 説明中 -----

「つてなことがあつたんだ」

「カツコイイー、さすがは僕のリュウだねー」

「お前のじやねーけどな」

「で、お礼として料理を作りに來たと」

「そういうことだ、なつアリア

「そうござります、では早速作らせていただきますね」 トトッ

----- 晩飯 -----

「豪華だな」

「少し奮発してしまいましたわ」

「僕はうれしいけどねー」

「とりあえず、たべてしまおう」

「そうだな、じゃあ

「「「「「いただきま

----- 食事中 -----

「そついえばさー、レナつて獣人族と人のハーフなんだって」モグ

「物を食べながら話すな、つてマジでー？」モグモグ

「うん、レナが言つてたもん」

「じゃあさ、耳とか生えてたりすんのか？」

「耳は生えてないぞ、尻尾が生えてる」

「見せてくれよ」

「無駄だよー、さつき僕が何回頼んでも見せてくれなかつたんだ」

「リュウが言つならいいぞーー」

「じゃ見せて見せて」

「ほり」ピヨコン フリフリ

「さわつていい？」

「だめだ！触られるとなんかぞわつとする」

「ふーんじやあやめとくか」

「そうしてもらえると非常に助かる」

「わかつたよ、あーうまかつた、」ヒカルツカモ、アリア

「おそまつをまです」

「僕もごちそつをまー」

「私もだ」

「わたくしが、かたずけておきますので、くつりこでこでください」

「リュウーここに座つてー」

「なんだ、ゼウス？」ストン

「えい」スポン

「膝枕つてのはフツー逆じやないか？」

「いいのいいの、僕がされたいんだからー、あとあと頭撫でてー」

「はいはい、わかつたよ」ナデナデ

「うにゃー」（気持ちいいな）

-----10分後

「うー、」スヤスヤ

「寝ちゃつたか」ナデナデ

「そのようだな」

「レナか、先に寝ていいぞ、ゼウスは俺が見とくから
では、わたくしは帰りますね」

「おー、今日はありがとなー」

「ええ、ではさようなら」

「じゃなー」

「じゃあ私は先に寝てこるべ

「おー、おせすみー」

スズラン亭にて（後書き）

冒険してないよこれ
次は冒険しよう
そうしよう

初めての戦闘（前書き）

今日は冒険するかも
しないかも

初めての戦闘

- - - - - スズラン亭・桜の間

「んん」

朝日がまぶしい、いつの間にか寝ていたようだ

「ゼウスは？」

隣で毛布を被つて寝ている

「毛布？レナがかけてくれたのか？」

なんだかいい匂いがする

「ん？起こしてしまったか？」

レナがキッチンから顔を出してきた

「おはよう、別に大丈夫だ」

「そうか、とりあえず、ゼウスをおこしてくれないか？」

「ん、わかった。ゼウスー、起きるー、朝だぞー」

「うにゅ、おはよう」

「おはよう」

「朝ごはんが出来たぞー」

「ほら、レナが呼んでるから、いくぞー」

「うん」

「それじゃ」

「「「いただきます」「」」

- - - - - 食事中

「あのはー、ひょうは、ひやにふるのー？」モグモグ

「なに、言つてるかわかんねーし、きたねーから食いながらしゃべんな」パクパク

ゴクン「あのさー、今日は、なにするの？」

「とりあえずは、武器を揃えて、隣町を田指す」

「そうだ、ゼウスにリュウはなしがあるんだが」

「なんだ？」

「パーティを組まないか？」

「パーティ？」

「つてなーに？」

「しないのか、簡単にいえば一緒に行動するグループみたいなものだ」

「組むとなんかあるのー？」

「色々あるが一番でかいのは、宿屋などの割引だな」

「どうやって組むんだ？」

「申込書を点在する関所のどこかに提出だな」

「申込書つてどこでもらえるのー？」

「それも関所でだ」

「んー、まあ別にいいぜ、ゼウスはどうだ？」

「僕も別にいいよー、ライバルはいた方がいいしねー」

「何のライバルだよ。まつ、つーわけで俺らは構わないぜ」

「関所は隣町の途中にあるからな、そこで申請をしようつ

「じゃそれで決まりだな」

武器屋 にて

「そういや、レナの武器はどんななんなんだ？」

「私のか？私は、弓種類の 狩人の弓 だ

「ハンターズ・ボウ 狩人の弓 ？」

「ああ、バリスタ 重豪弓 と 軽量弓 の中間ぐらいの武器だ

「同じ種類の武器でも色々あるんだな」

「ああ、たくさんあるぞ」

「リュウナー、僕これにするー」トテトテ

「なんだこれ？」

「ロッド・カーテゴリ 杖種類の 魔術師の杖 だな」

「クリスタルロッドってやーんだよー」

「ゼウスも決めたか、リュウはなにするんだ？」

「俺はこれにしようかなー」ガチャ
ソード・カーテゴリ ウンハンド・ソード

「剣種類の片手剣か」

「これを一本とこれを一本」ズツ
三本もか！しかも最後のは デュアルハンド・ソード
おっちゃんこれ売つてくれ
両手剣 より重い バスター・ソード
重大剣 をか！」

「あいよー、クリスタルロッド一つにアイアンソード一本にアロン
ダイト一つだね」

「ゼウス、金を頼む」ヒソヒソ

「わかつたよー」ヒソヒソ

「代金は16500ギルドだね」

「はいよ」ジヤラ

「お預かり、20000ギルドだね、お釣り、3500ギルドだね」

「あんがとさん」

「装備もそろえたし隣町に行こうか」

「そうだな」

-----町の入り口

「じゃあしゅっぱーつ」

「待つてください！」ダダダ

「ん？」

「はあはあ、良かつた間にあいましたわ」

「アリアか、どうしたそんなに慌てて」

「あの、もしよろしければ、わたくしもついていくてもよろしいで
しょうか？」

「大歓迎さいいよな二人とも」

「僕も賛成だよー」

「私もだ」

「つーわけだ、これからよろしくな

「よろしくお願ひいたします」ペコリ

- - - - - 隣町への道・小高い丘

「んー、見晴らしがいいねー、ねつリュウ」

「気持ちいいのはわかるがはしゃぐなよ」(ナルゼ)

「うわっ」

「ほら、言つたとおりだろ、だいじょつぶかー」タタタツ
「リュウ、転んだんじゃないよアレだよアレ」

「ん? うわっ、猪? サイ?」

ゼウスの目線の先には、猪とサイを混ぜたみたいなモンスターがいた
「あれは、ルーキーオークっていうモンスターだ」

「ルーキーオーク?」

「ああ、一足歩行する前のオークだ」

「簡単に倒せるぞ、こう剣を水平に構えてだな」
(へーなんか、野球のバントみたいだな)

「いっしていると向こうから勝手に突っ込んできて自滅する」
言つてゐるそばから突つ込んできた

「ブモー!!」

(きもつこじつけめえーー!)

「ブ...モオオ...」

(ほんとに自滅したよ)

「きやあ!」

「どうしたアリア」

「い、いえ少し血がかかってしまいました
見るとアリアのローブに血がかかっていた

「次の町に着いたら新しいのを買つか」

「え、ええ、その時は選んでくださいませんか? / /

「俺がか? 別にいいけど、俺センスないぞ」

「かまいませんわ」

「そか、じゃあ、そうじよ!」

「えー、アリアだけずるいー、僕のも買ってよー」グイグイ

「わかつた、わかつた買ってやるから袖を引っ張るな」

「買つてくれるの？じゃあ僕のも選んでよーーー

「いいぞー、別に選ぶくらー」

「リュウ、私も買つてもらえないか？」

「いいぞ、仲間はずれは良くないしな

「そのお、できればわたしのも…」

「選んでやるよしつかりな

「そうか、ありがとうーー

「まあ、とりあえず、全部次の町に着いてからだな

初めての戦闘（後書き）

ネタがないので
次は人物紹介や変更点それから、他の
説明をしようかと

パーティ結成！！（前書き）

ついにパーティ結成

あくまでもパーティでハーレムじゃないです

諸事情により

人物紹介等を変更して

ストーリーを進めます

そして、いまだに地の文の入れ方が掴めない

パーティ結成！！

- - - - - イルジオの関所

「なあレナ、どこで貰えればいいのかわかんないから、申込書を貰つてきてもらえるか？」

「ん。わかった、ちょっと待つてくれ」タタタッ

「リュウぅー、疲れたから抱つこおー」トテトテ

「お前結構身長あるから出来ないな」

「むー、じゃあじゅあ、これでいいでしょ」キュウウン

ゼウスがひかりだした

光が収まるどゼウスが一回り小さくなつていた

「こんなことに力を使つな」（こいつの力、便利だな）

「小さくなつたんだからー、抱つこしてー」

「後でしてやるよ、あとでな」（小さいな、140cmぐらいか？）

「ゼウスさん？淑女は人前では、男性にベタベタしないものですがよ」（なぜ、小さくなられたのでしょうか？魔法かなにか、なのでしょうか？）

「僕は淑女じゃないもんねー、だからー、リュウぅー抱つこおー」

「そんな甘つたるい声をだすな、宿屋に着いたらうりでもしてやるから」

「ほんとにー？じゃあ僕いい子だから我慢するうー。えらいでしょー」Hへへ

「ああ、いい子、いい子」

「じゃあさ、褒めて、褒めてー、そして頭撫でー」

「おー、えらいえらい。ゼウスはいい子だな」ワシャワシャ（体が小さくなつたら、精神まで幼くなつた？）

「えへへーーーー

「ほれ、もうおしまいだ。レナが戻ってくるまでおとなしくしてろ」「いや、前からこんなんか」

「もう少しくらい、いいじゃんよー」ブーブー

「持つて来たぞ、全員こここの欄に名前を書いてくれ」ピラッ

「こ」でいいのか?」

「いや、リュウは一番上だ」

「なんで?」

「リュウにはリーダーになつて貰う」

「おっ、俺がかあ!? なんでまた?」

「唯一の男だし、頼りになるからだ」

「納得いかないけど、しようがないかあ」カキカキ

「じゃあ、僕はリュウの下ー」カキカキ

「では、次はワタクシでよろしいですか? レナさん」

「ああ、構わない」

「では遠慮なく」カキカキ

「最後は、私だな」カキカキ

「意外と簡単なんだな」

「そうだな、じゃあこれを提出していくからもう少しだけ待つてくれ

「おう、わかった」

- - - - - 1分後

「承認が終わつたぞ。これがパーテイ証だ」サツ

「へー、人数分あるんだな」

「ああ、各自で一つずつ持つてくれ

「わかつた、何から何までありがとな

「いやいや、私から提案したことだからこの程度当然だ」

「そりが、まつありがとな、ほれ、ゼウスお前のだ、絶対に失くすなよ」「み

「失くさないよー、僕とリュウどが仲間だって証だからね
「そんなこと言つてもらえるなんてなんだかうれしいな」
「何回でも言つてあげるよー、だって僕はリュウが大好きだからね
「お前何言つてんだよー／そういうのは好きなやつに言え
「僕は本当にリュウの事が好きだよ？」ダキッ

「はいはい、からかうのもいい加減にしろ。そして離れる」グググ
「やだね離れないもん」

「ほら、ゼウスさん、リュウさんが困つてらつしゃるから離れて差
しあげなさい」ヒヨイツ

「うー、はーなーせー」ジタバタ

「ありがとう助かつたよ、アリア。つてお前意外とちからあるのな」
「ええ、武器が杖種類ロッド・カーティの重鈍杖メイスとゆづ金属製の杖ですか
「金属製つてことはやつぱり重いのか？」
「ええ、とても両手剣デュアルハンド・ソードの軽い方ぐらいでしじうか」

「結構重いんだな」

「これを使って敵に殴りかかるので嫌でも筋力がつきますよ
「意外とエグイ戦い方だな」

「リュウいつまで喋つてるんだ、出発するぞ」

「リュウー、早く行こうよー」

「悪い悪い、今すぐ行くよ。アリア行こうぜ」

「ええ、わかりましたわ」

「早くー」

「そんなに急かすなつて」

パーティ結成！！（後書き）

次こそは

人物紹介&その他もうもうです、です。

第2の町・ウイルティア（前書き）

恒例の「」とく

グダグダの文

支離滅裂な文です

そして、宿屋から出ません

アリアとレナが

ほとんび空氣です

第2の町・ウィルティア

----- ウィルティア入口

「」でもやはり、門番が声を掛けてくる

「ウィルティアの町によつ」そ

「あの、こここの町の宿屋でお勧めのがあつたら教えてくれないか?」

「いいですよ、えーと価格の安さでいえば民宿サキ、品質でいえばアースト・ゲイジ、バランスでいえばレオルホテルですね」

「だつてよ、どこにする?」

「僕は、どこでもいいよ~、リュウとくつろげれば

「そうか、アリアとレナは?」

「わたくしもどこでもいいですわ」

「私はなるべくお金を残しておきたいから民宿サキがいいと思つ」

「じゃあ民宿サキの場所を教えてもらつてもいいですか?」

「サキは大通りをまっすぐ行つて、行き止まりのところを右に曲がつて二一つ田のところですよ」

「ありがとうござります」

「じゃ、行こ」

「レッツゴー」

----- 民宿サキ・カウンター

「お部屋はどこにいたしますか?」

「何があるんすかね?」

「松・竹・梅・桜があります」

「んー、何となく桜でいいか」

「ありがとうございます」

「そっち、入口じゃないですか?」

「桜は隣の隣の家ですのです」

「えつ！？値段は？」

「松の2倍といつたところでしょ、うか」

「松の値段は？」

「4名様で1日5000ギルです」

「てことは、1日10000ギルか」

「さあ着きましたよ」

「田の前に二階建ての家があつた

「エリが今日の寝るところ？」

「そりだぞ、汚さないようにな」

「僕そんなに幼くないよ～

「では代金を」

「何日泊るんだ？」

「2日ぐらいがいいな」

「そりですわね、ゆっくりしたいですし

「なら、20000ギルですね。パーティー証をお持ちですか？」

「持つてるだろ」

「なら20%引きで16000ギルです

「よつと、これでちょうどか？」

「確かに16000ギル頂戴しました。それではこれが鍵です、ご

ゆづくつ

「 - - - - 桜の間・リビング

「さてと着いたがまず、部屋割りを決める

リュウがそう話を切り出す

「ふかふかだよコレ」「こす」「こー！」

ソファーにダイブするゼウス

「話を聞け！」ゴンツ

「いつたーなにも拳骨しなくてもいいじゃんよお～」「で部屋割りとはどういうことだ？」

レナが不思議そうな顔で聞き返す

「俺たちは4人だが個室は3つだ、だから2人の部屋と1人の部屋を二つ決める」

「わたくしはできれば1人がいいですわ」

「私もなるべくなら1人がいい」

「ゼウスは？」

「僕はリュウと一緒にいいよ、てゆーか一緒にないとやだ」ギュツ

「わかったから、抱きつかな」

「次はだれがどの部屋にするかだが、俺たちは広めの奥の部屋を使つていいか？」

「いいですよ」

「いいぞ別に」

「じゃあ二人はどうちが手前とリビングの奥を使うか決めてくれ」

「じゃあ、私がご飯を作るからリビングの奥でいいか？アリア」

「それで、かまいませんわ」

「今日は私が買い出しに行つてくるから休んでてくれ」

「あ、わたくしも行きますわ」

「そうか、じゃあお言葉に甘えさせてもらひつつ

「ああ、行つてくる」

「行つてきますわ」

「行つてらつしゃい」

「行つてらつしゃーい」

ガチャ、バタン

「じゃあ、部屋に行くか」
「やつしょ~」

-----リュウとゼウスの部屋

「ベットが一つだけってどうこうことだよ」

部屋を見てうなだれるつづか

「机と椅子もあるよ~」

「そうこうことじゃない」

「テレビもあるよ~」

「だから、そうゆう」とじやねえ。一人で一緒に寝ないととなるだ
る

「僕は別にいいよ~、てゆうより一人じや寝れない」

「お前神様だろ、なんか怖いのか?」

「ちがうよ、リュウと一緒に寝る」とがだよ

「んーよくわからんが、寂しいのな」

「そうゆうひと、じや僕トイレ行ってくるね」

「もひつたよ~」

「ゼウスかこっち来いよ」

リュウがベットの上で胡坐をかきながら手招きをする

「どうしたの?」

ゼウスがそばによる

「ほりここ座れよ、約束したら、抱っこじゃないけど膝の上で我慢
してくれ」ポンポン

リュウが膝の上を叩く

「うん、全然いいよむしり」ちのがいいかも…」トスッ
ゼウスがリュウに向かってくつろにして膝に座る

「お前小さいな」（あ）の下に収まるって結構小さいんじゃない
？）

「リュウが小さい方がいいって」ギュッ
ゼウスがリュウの背中に手を回す

「そんな風にいったかな？」ナデナデ（なんか小さい妹みたいでか
わいいな）

「うにゃーーー、いったよー」（気持ちいいな）

「そうだつたかな？」ナデナデ ギュッ

「うんーーー」（リュウの方からギュッとしてくれるなんて嬉しい
な）

「そりか」ナデナデ（こいつ暖かいな）

「リュウつていい匂いだね」スーザー

「そりか？香水とかは付けてないけどな」ナデナデ

「うん、なんてゆうか落ちつく匂い」

「そりなのか」

「そうだよ、あとをお願いがあるんだけど、いい？」

上皿づかいで見上げるゼウス

「せつきのゲンコツはやつすぎたと思つからこごぞ、なんだ？」（

あぶねー、一瞬ときめいちやつたよ）

「あのね、寝転がつてね、ギュッとして？」

「ぐつ、それは…」（さすがに妹みたいっていつてもそれはちょっと）

「さつきにいぞつて言つたのに～、うれつき～」ウルウル
「くつ、しゃーねーいいぞ」『ロロン』（涙を見せられたら断われね
ーだろ男として）

「やつたあ～、うでまくらだ、うでまくら～」『ロロン

「これでいいか?」ギュッ

「ふわあ～／＼気持ちいいな～」ギュッ ウトウト

「眠いのか?」ナデナデ

「ん～、ねむい」ウツラウツラ

「寝ていいぞ」ナデナデ

「やだ」

「なんでだ?」ナデナデ

「リュウがどつかいやう氣がして」ギュッ

「そんなことしねーから、寝てもいいぞ俺はここにいるからな」ギ

ユッ
「う、ん、わ…かつ…た」コテン

「寝たか、俺も寝ようかな、お休みゼウス」

-----数十分後

「んん、ふあー、ゼウスは?」チラ

「スー、スー」

「まだ寝てるか。ちょっとトイレ、つと」『ロロン』

「んう」ギュッ

「大丈夫すぐ戻るよ」ナデナデ

ギイ、バタン

「ふー、スッキリした。ん?」

グスツ……グス…トテトテ

ドアの向こうから泣き声のよつなものと足音が聞こえる

「まあかな…」ガチャ、バタン、

リュウがドアを開け部屋に入ると

泣き顔で部屋をさまよってこるゼウスがいた

「あたつちやつたよ、ゼウスどうしたんだ?」タタッ
ゼウスの傍に歩み寄る

「グスツリュ…ウ?リュウう~」ギュッ
ゼウスがリュウへ抱きつく

「どうしたんだよ?泣いて、何かあったのか?」ナデナデ
優しく、あやすように、ゼウスの後頭部を撫でる
「だって、起きたらリュウがグスツいないんグスツだもん。絶対に
グスツ居なくなないって言つたのに」
泣いて赤くなり、うるんだ瞳で見上げるゼウス

「「めんな、勝手にいなくなつて」ナデナデ
「怖い夢だつてさグスツ、見て起きたのにグスツ、リュウがいない
んだもん」

「悪かつたな、許してくれ」ポンポン

「じゃあさ、今日ずっと一緒にいて?抱っこして?」

「いいぞ、ほんとに」「めんな」ギュッ(やたらと甘えてくるな)
「抱っこして?」

両手をあげて抱っこをねだつてくる

「はこよ、よこしょつと」ヒヨイッ

「もう離れなによ」ギュッ

強く抱きついてくる

「さつき見たいに座つていいか？」ナーテナーテ（髪、綺麗だな）
「いいよ~、ギュッしてくれてるなら何でもいいよ」ギュッ

ゼウスを抱きかかえたままさつきのようベッドに座る

「えへへ~、リュウって暖かいんだね」

「お前もあつたかいぞ」

「気持ちいいな。んふふ~」ギュッ

さつきにも増してゼウスがくつづいてくる

（何でもくつづきすぎじゃないか？まだレナとアリアは帰つてこないのか？）

その2に続く

第2の町・ウイルティア（後書き）

なんか収集がつかなくなつたので

こんなとこひで続きといつゝことぢや

中途半端で済みません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6656x/>

俺が神と出会ってから

2011年11月2日03時11分発行